

## 三楽

健康支援センター センター長、数学教育講座 佐々木 徹郎

三楽という言葉があるそうです。原典に当たったわけでも、専門家でもないのに、人が書いたものを読んだ感想です。三楽のうちの一つは「健康」だそうです。健康なときは、それをありがたいと思ひ、楽しみとすることは希です。しかし「一病息災」といわれる通り、病気を経験すると、健康の楽しみを悟るようになります。

二つ目は「正しい生き方」だそうです。これも難しいことです。まず、運命や環境によっては、悪いと知りながらやってしまう、さらにやらざるを得ないこともあります。また、人は本来利己的にできています。自分に都合が良ければ正しいと考えがちです。しかし、争いは「正しい者」と「不正な者」の間で起こるのではなく、「正しい者」と「正しい者」の間で起こるものです。他者の立場で考え、さらに「何が正しいのか」を理解することは容易ではありません。それだけに、正しい生き方ができるとすれば、それは楽しみであることは確かです。

三つ目は「人を育てる」ことだそうです。「人を残すは上の上、仕事を残すは中の中、金を残すは下の下」といわれます。人を育てるには「おおらかさ」、つまり長期的観点や計画、それに労力や資金を必要とします。

この点では、教育学部に所属していることは、ありがたいことです。教育はだれでも体験することで、大抵の人は一家言もっています。しかし、自分の体験談に基づく独善論では教育学にはなりません。わが国で「教育学」という言葉がつくられたのは明治時代になってからで、伊沢修二の著書が初出であったとされています。同氏は20代で愛知師範学校の校長であった人です。また、教育学そのものが成立したのは、18世紀に学校教育が始まってからです。教育学は、意外に新しい学問なのです。

本質的に、人間にはこの「三楽」以外の楽しみは虚構だということのようです。僅か2年間ではありましたが、健康支援センター長として、スタッフや関係者に会い、また本学でメンタルヘルス学会を開催できたことは、楽しい思い出となりました。そして「三楽」に関わることができたことは、誠に有り難いことです。今後も、心に留めて生きたいと思っております。関係の皆さまに、心から感謝申し上げます。